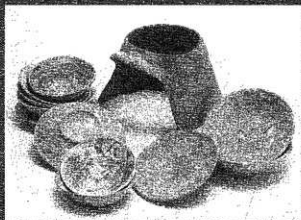


笠井若林遺跡 4 次

Kasai-wakabayashi site - The 4th excavation report -

— 浜松市「笠井若林遺跡」第4次発掘調査報告書 —



2000年8月

(財) 浜松市文化協会

The Association for Cultural Creation Hamamatsu City

例言

- 1 本書は静岡県浜松市笠井町における、笠井若林遺跡の発掘調査（平成12年4月24日付、教文第3-208号）にかかわる報告書である。
- 2 発掘調査は診療所建設に先立ち実施した。発掘調査は事業者（金田晴次氏）が財団法人浜松市文化協会に委託し、浜松市博物館が調査の指導にあたった。調査にかかわる費用は全額委託者が負担した。
- 3 笠井若林遺跡は過去3次にわたる発掘調査が実施されている。本書において報告する調査を4次調査とする。
- 4 現地調査および整理作業は鈴木一有（浜松市博物館）が担当し、中村玲子（浜松市文化協会）、岡田遼江、鈴木純子、原田和了、林至美、峯野洋子、潮浅佳世が補佐した。報告書の執筆、写真撮影は鈴木が行った。
- 5 調査にかかわる諸記録及び出土遺物は、浜松市博物館が保管している。
- 6 本書で用いる方位は真北を示す。標高は海拔高である。
- 7 本報告をまとめるにあたり、以下の方々からご教示、ご協力を賜った。記して謝意を示す。
井村広巳、大谷宏治、岡安雅彦、杉井健、塚本和弘、松井一明、丸杉俊一朗、清口彰啓、山崎克巳
- 8 本書で報告する土器の断面と、種類の関係は以下のとおりである。

■ 須恵器 □ 土師器 ▨ 灰胎陶器 ▩ 緑釉陶器 ■ 中世陶器

目次

例言

第1章 序論	1
1 調査経緯	1
2 地理的・歴史的環境	2
第2章 調査成果	3
1 検出遺構	3
2 出土遺物	6
第3章 総括	12
図版	

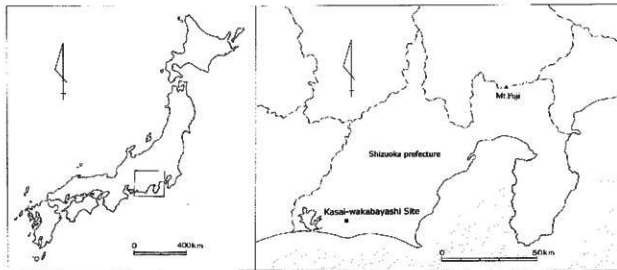


Fig.1 笠井若林遺跡の位置

第 1 章 序 論

笠井若林遺跡は過去3次にわたる調査によって律令時代の集落跡であることが判明している。今回報告する4次調査においては、律令時代集落の範囲を確認することを主目的とした。

1 調査経緯

笠井若林（かさいわかばやし）遺跡は、静岡県浜松市の北東部にあたる笠井町に位置する。1990年代後半以降、県道浜松環状線の建設工事が笠井町や南接する恒武町において実施され、道路建設に伴う発掘調査が（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所によって継続的に行われている。また、（財）浜松市文化協会と浜松市博物館も県道浜松環状線周辺における発掘調査を断続的に実施しており、笠井地区における過去の人間活動にかかわる新たな知見が集積されている。

笠井若林遺跡は南側一帯に接する恒武西浦遺跡、恒武西宮遺跡、山の花遺跡、恒武東覚遺跡、社口遺跡などと連続している（浜松市2000）。これらの遺跡を総括して恒武遺跡群と総称する。恒武遺跡群においては、地点を変えながらも古墳時代以降の継続的な遺跡の存在が確認でき、広域にわたり安定した土地であったことがうかがえる。

笠井若林遺跡は1998年から2000年にわたって、（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所によって3次におよぶ発掘調査が実施されている（Fig.2）。これらの調査により、律令時代（奈良時代および平安時代）と戦国時代に中心をもつ集落跡の存在が確認されている。とくに奈良時代においては墨書土器や円面硯が数点確認され、東に接する社口遺跡とともに、その官衙的な性格が注目された。

1999年、奈良時代の遺構が確認された笠井若林遺跡1次調査地点の近隣地域において、診療所の建設が計画された。開発対象地は1次調査地点の北東、約50mに位置し、現状の地形を考慮すれば律令時代の遺跡が存在する可能性が高いと推定された。この計画のもと開発者の協力を得て、浜松市博物館と（財）浜松市文化協会は、2000年5月22日～24日において、開発対象地における部分的な発掘調査を実施した。調査面積は100㎡である。

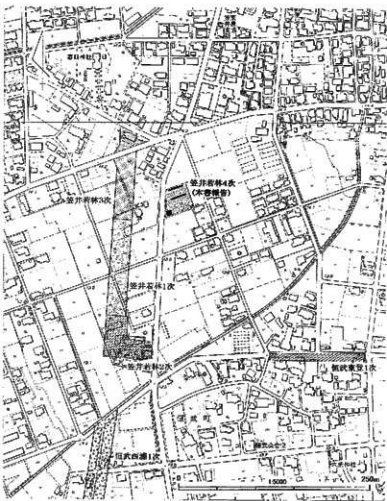


Fig.2 調査地点の位置

2 地理的・歴史的環境

地理的環境 浜松市の東境を流れる天竜川は、東の磐田原台地と西の三方原台地に挟まれた部分に沖積平野を形成してきた。天竜川の流路は三方原台地と磐田原台地の間において、絶え間ない変更を繰り返している。現在、笠井町は天竜川の西岸となっているが、過去においてはこの限りではない。Fig.3に示すように、天竜川の旧流路は網の目のように沖積平野を流れていたことが分かる。この中で笠井地区は広域な微高地として安定した環境を保っており、遺跡が継続的に形成される地理的条件を示している。

歴史的環境 笠井地区の微高地には、弥生時代以前の遺跡は知られていない。対照的に古墳時代以後においては継続的な人間の活動が認められる。恒武西宮遺跡4次調査で検出された古墳時代前期前葉の方形周溝墓や、山ノ花遺跡・恒武西浦遺跡で検出された古墳時代中期の大溝などが注目できる。とくに後者の溝からは、豊富な木製祭祀遺物を始め、石製祭祀遺物、大量の土器が出土しており、有力階層が執行した祭祀の実態が明らかになった。群集墳が盛行する古墳時代後期の有力な古墳として平野部に単独で立地する姫子森古墳の存在も目を引く。姫子森古墳は直径24mを測る円墳であり、石片袖式石室を内部主体にもつ。群集墳の築造者とは隔絶した有力な被葬者像が想定できよう。

奈良時代の遺跡としては社口遺跡・笠井若林遺跡・笠井下組遺跡などが知られる。社口遺跡においては円面碗の出土が知られ、青術的色彩を帯びた遺跡の性格が指摘できる。

今回調査した地域の西側50mには、笠井若林遺跡1次調査地区が存在する。1次調査では、奈良時代後葉から平安時代初葉にかけての竪穴住居が検出され、数点の墨書土器も出土した。今回の調査では、平安時代に属する9世紀から10世紀にかけての遺物が集中的に出土した。平安時代にかかわる遺物は、周辺の遺跡でまとまって出土した例が少なく、貴重な資料を提供することとなった。

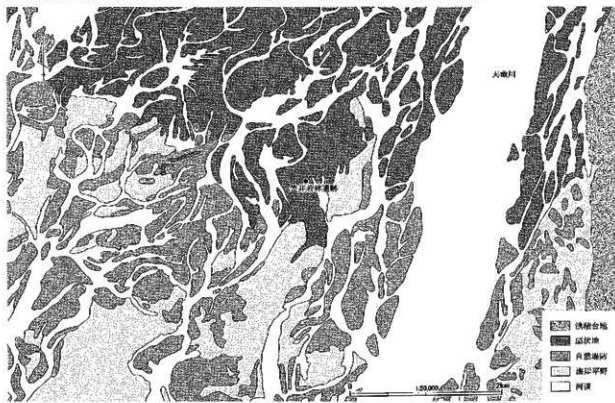


Fig.3 笠井地区を中心とした地理的環境

第 2 章 調査成果

調査地区は北トレンチと南トレンチ、南西別区の3箇所に分かれる。検出遺構は溝が中心であり、9世紀後半～10世紀の土器が出土した。

また、8世紀後半～9世紀前半の移動式家が南西別区から出土した。

1 検出遺構

(1) 調査の概要

調査地区の設定 今回の発掘調査は建物の基礎部分にあたる北と南の2本のトレンチと、敷地内南西に設定された浄化槽埋設部分にあたる平面調査区の3箇所に分かれる。以下、北側に設定したトレンチを北トレンチ、南側に設定したトレンチを南トレンチ、南西部分に設定した平面調査区を南西別区と呼称する。調査面積は南北トレンチがそれぞれ30㎡、南西別区が40㎡であり、調査総面積は100㎡である。

基本層位 調査した3地点ともに、同様の土層堆積状況が確認できた。1層は盛り土である。2層は暗茶褐色砂質土であり、盛り土以前の旧表土と推定される。3層は明褐色砂質土であり、土器片が少量ながら含まれる。調査対象地の北、東、南に広がっている畑と同様の土質であり、畑の耕作土と推定できる。4層は暗褐色粘質土であり、土器を含む。4層中に含まれる土器は細片化しており、図化できる個体が極めて少ないが、微細な山茶碗の破片が数点確認できた。これらの遺物を最大限評価して、4層の堆積年代を12～13世紀以降と推定しておく。

5層は暗茶褐色粘質土である。炭化物や土器を多量に含み、下部には遺構が検出できる。硬く締まっており、5層を撤去しての遺構検出作業は困難であった。5層中に含まれる土器は8世紀後半から10世紀までの時間幅がある。包含層から出土する遺物群の主体は9世紀後半～10世紀頃であり、検出遺構の年代と一致する。

6層は明褐色粘質土で、遺物は含まれない。6層上層が、今回の調査における遺構検出面である。6層も硬く締まっており、乾燥すると割ることが困難である。礫が入る箇所があり、遺構検出作業をさらに困難にさせた。7層は礫層である。笠井地区の基盤層として広域に認められることができる層である。礫層表面は、標高12.8～13.4mほどであり、高低差が認められる。敷地内において、北東側が高く、南西側が低い傾向がある。笠井町の北西部にあたる御殿山遺跡で確認した礫層の標高は14.3～14.5m、恒武遺跡群の南部に

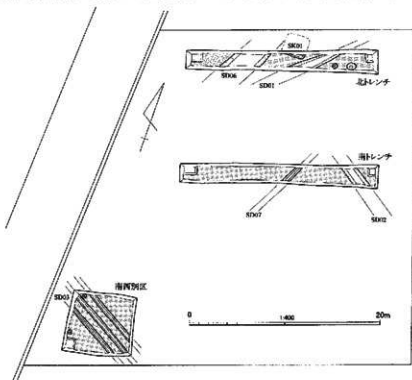


Fig.4 調査地区全体図

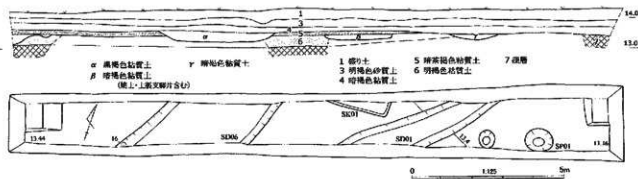


Fig.5 北トレンチ実測図

あたる恒武西宮遺跡で確認した礫層の標高は10.5～11 mほどであり、礫層が北から南に向かい緩やかに傾斜していることが確認できる。

(2) 北トレンチ

概要 (Fig.5) 開発対象地の北端に設けた東西20 mほどのトレンチである。調査区の東側では、6層が薄く、遺構検出面において礫層が露出した箇所がある。検出遺構は溝2、竪穴遺構1、小穴2である。出土遺物から判断して、これらの遺構は9世紀後半から10世紀頃と推定できる。

SD06 北トレンチの西側において検出した幅が広い溝である。溝の幅は約3m、深さは30 cmである。溝の埋土は黒褐色粘質土であり、遺物包含層である5層上面において検出できる。溝の底面は一定であり、深さに対して幅が広いことから、竪穴建物や土坑など、溝以外の形態である可能性がある。SD06からは1～33の遺物 (Fig.10) が出土した。灰軸陶器は黒管90号窯式の特徴が看取でき、おおよそ9世紀後半段階の遺構と捉えることができる。

SD01 北トレンチの中央やや東よりにおいて検出した溝である。幅は約1m、深さは15 cmほどである。SD01の東側には、礫層が露出しており、遺構の正確な形状を捉えにくかった。埋土は暗褐色粘質土である。34～37の遺物 (Fig.11) が出土した。37の土師器の坏身が8世紀代の特徴を示すが、その他の遺物から判断して、SD06と同様に9世紀後半頃の遺構と捉えられる。

SK01 北トレンチの中央北端で検出した遺構である。方形の掘り込みを持つ可能性があること、土製支脚の小破片が出土したこと、焼土や炭化物が僅かながら埋土中に認められたことから、SK01は竪穴建物の可能性がある。出土遺物は小破片しか得られず、遺構の時期を明確にすることができない。遺物包含層からは、奈良時代後半期の遺物も僅かながら出土していることから、SK01の年代は8世紀後半から9世紀頃の間求めておきたい。

SP01 北トレンチの東側において小穴を2箇所検出した。いずれの小穴も底面が一定せず、柱を据えたような穴にはならない。土器の小破片が出土したが、遺構の時期を明確にする資料はない。

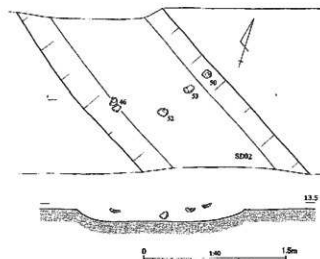


Fig.6 SD02遺物出土状態

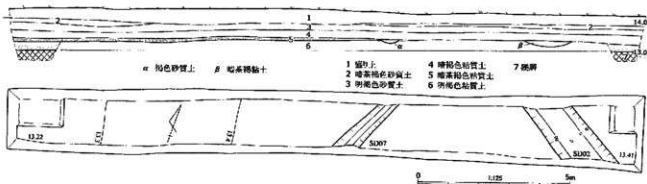


Fig.7 南トレンチ実測図

(3) 南トレンチ

概要 (Fig.7) 北トレンチの南側、開発対象地の中央やや北よりに設けた東西20 mほどのトレンチである。遺構検出面である6層が全面において確認されたが、遺物包含層(5層)の広がり、北トレンチと比べて薄く、遺構の量も少ない。トレンチの東端で確認したSD02を除くと、注目できる遺構はない。

SD02 (Fig.6) 南トレンチの東端で検出した溝である。幅は1.4m、深さは15 cmほどである。埋土は暗茶褐色粘土であり、非常に硬い。出土遺物量は比較的多く、43～63 (Fig.12)の遺物が出土した。出土遺物の特徴は、北トレンチSD06と近い。ただし、SD06から出土した灰釉陶器の底部はすべてヘラケズリ調整かナデが施されていたが、SD02から出土した灰釉陶器には糸切痕が見られる個体(45・46)が含まれる。底部に糸切痕を残すことは、折戸53号窯式期以後に一般化する底部調整技法の特徴と捉えられる。遺構の時期を限られた資料によって確定することは困難であるが、SD02の時期をSD06よりも若干早く持たせて、9世紀後半～10世紀前半と推定しておく。

SD07 南トレンチの中央やや東よりに検出した溝である。幅60 cm、深さ10 cmほどの小規模な溝である。遺構埋土は褐色砂質土であり、遺物包含層である5層上面において検出可能である。出土遺物が皆無であるため、遺構の時期を確定することはできない。笠井若林遺跡の1次調査で確認されている中世の小規模溝群と、遺構の形状、検出状況などが類似していることから、中世の遺構と推定しておく。

(4) 南西別区

概要 (Fig.8) 調査対象地の南西部、浄化槽埋設予定地において設定した平面的調査区である。調査区の中央を斜めに横切って3本の溝が検出され、小穴も2箇所において検出された。出土遺物は少ないが、移動式竈(77)や緑釉陶器(76)など、今回の調査を特徴づける遺物が出た。遺物包含層である5層は認められず、4層の下に遺構検出面である6層が広がっている。

SD03 (Fig.9) 調査区の中央を斜方向に横切る平行した3本の溝(SD03～05)のうち、最も南西よりの溝である。SD03～05は、幅

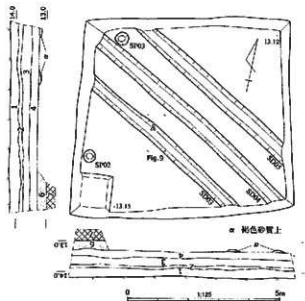


Fig.8 南西別区実測図

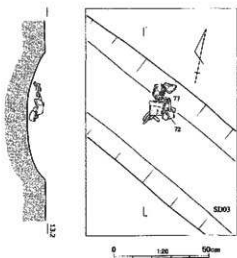


Fig.9 SD03移動式電出上状態

時期を明確にできないが、おおよそ、8世紀後半～10世紀代と推定できる。

SP03 調査区の北西端、SD04とSD05の間に扶まれて検出された小穴である。直径40cm、深さ30cm程度を測る規模は、SP02と酷似する。SP02、03以外に柱穴の可能性があるような小穴を検出することができなかった。灰釉陶器の破片74 (Fig.13) が出土しており、遺構の時期はおおよそ9世紀後半～10世紀前半頃と推定できる。

2 出土遺物

SD06出土遺物 (Fig.10) 北トレンチのSD06からは、1～33の遺物が出土した。1～18が灰釉陶器、19～33が土師器である。須恵器(39)がSD06に隣接する包含層から出土しており、須恵器が共存する可能性がある。

灰釉陶器は碗(1～14)、皿(15～17)、壺(18)が見られる。高台は1や10、13のような角高台に近い形態で外面中ほどに弱い稜線をもつもの、2や11のような内面が湾曲し外面は直立傾向が強いものが認められる。底部調整は1・2・16にヘラケズリが確認でき、それ以外の底部が遺存する個体はすべてナデ調整が施されている。口縁端部の外反傾向はつよく、7のように垂れ下がるような形態をなすものもある。灰釉が発色している個体は少なく、3、12、13、14、16、18に釉の発色が確認できる程度である。色調は、灰白色ないしは灰黄色を呈する。

19～23は土師器の碗である。19は外反する口縁を丁寧に形成する。口縁端部内面は段をなし、沈線が施される。色調は浅黄橙色を呈し、内面には赤彩が施されている。下部が欠損しているため確定的ではないが、灰釉陶器を模倣して高台がつけられていた可能性がある。20～23は高台をもたない碗である。逆台形を呈し、若干外反する口縁をもつ。口縁端部は内傾する傾向が強く、20、23は明瞭に面をなす。また、20の口縁端部内面には沈線も施される。内外面の調整はヨコナデを基本とするが、21などに顕著にあらわれるように指頭圧痕が残存する個体がある。赤彩は内面のみに確認できるもの(20・21・23)と内面と外面に確認できるもの(22)がある。

24は底部が欠損しているが、皿と考えられる。口縁端部の処理方法や成形技法など、碗20～23と同一系譜に属するものであろう。色調は橙色を呈し、内外面ともに赤彩が認められる。25は灰釉陶器の皿を模倣した土師器の皿である。内外面ともに、ヨコナデが顕著に施され、大きさも、灰釉陶器の皿と近似する。色調は浅黄橙色を呈し、内面に赤彩が施されている。27は鉢である。逆台形の体部から屈出して

40～50cm、深さ10cm程度の小規模な溝である。互いに平行関係にあることから、3本の溝は共存していた可能性がある。SD03の中央部において、70～73 (Fig.13)、77 (Fig.14)の遺物が集中的に出土した。図化したこれらの遺物のほかに、須恵器が数点含まれている。77の移動式電は、口縁と底部の破片が折り重なるように出土し、隣接して土師器製の口縁(72)もみられた。遺物が集中的に出土したことから、意図的に破片を一箇所に廃棄した可能性が考えられる。遺構の時期は、出土遺物から判断して、8世紀後半～9世紀前半と捉えられる。

SP02 調査区の南西端において検出した小穴である。直径40cm、深さ30cmの小穴で、柱穴として充分機能する形態をなす。遺構理土は黒褐色砂質土であり、遺構検出は比較的容易であった。出土遺物が無いため、遺構の

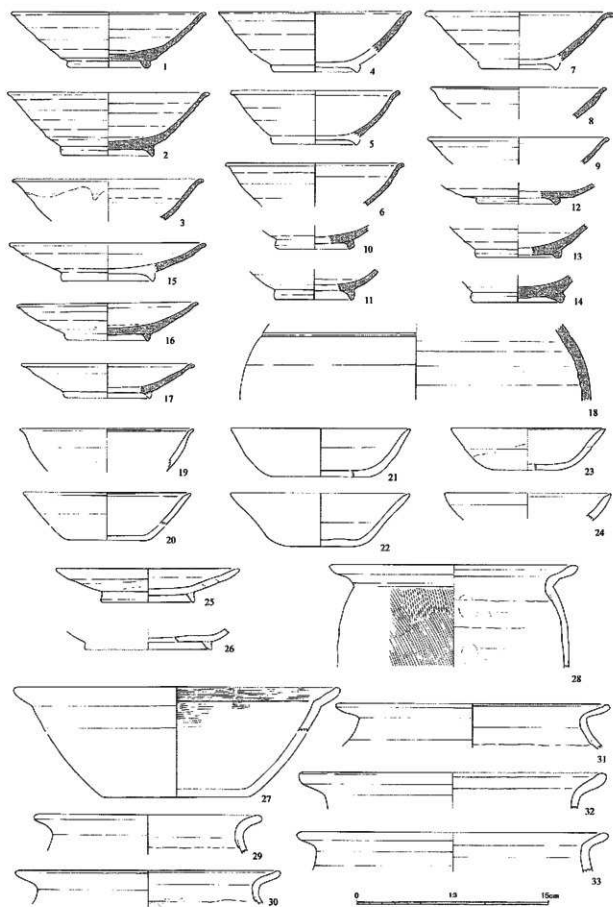


Fig.10 SD06出土遺物

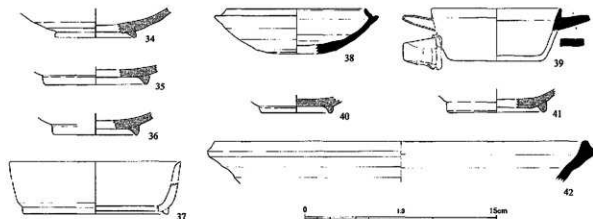


Fig.11 北トレンチ出土遺物 (34-37: SD01 38-42: 包含層)

外に広がる口縁部をもつ。口縁部は僅かに摘み上げたような屈曲があり、後述する土師器の甕との共通性がうかがえる。内面にはハナメが顕著に看取できるが、外面はヨコナデ調整が施されている。

28-33は甕である。口径は、18.0-24.4 cmであり、若干の大きさの差が存在する。28は胴部まで遺存する個体である。胴部外面はハケ、内面はイタナデまたはナデ、口縁部はヨコナデ調整が施され、奈良時代にみられた甕の製作技法と共通する。ただし、奈良時代後半頃の甕の口縁部は水平になる傾向が強いが、28-33はやや内側に傾いている。30・31の口縁部内面には、摘み上げたような屈曲があり、残る28・29・32・33は口縁部がやや厚く作られる。

以上の遺物群は、灰釉陶器の特徴から、黒笹90号窯式期に相当すると考えられる。時期的にまとまりが認められる遺物群と捉えられよう。実年代としては、9世紀の後半頃が想定できる。

SD01 出土遺物 (Fig.11) 34-37は、北トレンチのSD01から出土した遺物群である。34-36が灰釉陶器、37が土師器である。34の灰釉陶器は底部にヘラケズリ調整が施され、高台はやや変形しているが、角高台の名残を留めている。35・36の高台は三角形をなし、底部にはナデが施される。遺存部分が少ないため、確定的ではないが、これらの遺物はSD06と同様に9世紀後半頃を中心とした時期であると考えられる。37は土師器の坏身であり内外面に赤彩が施される。37は8世紀代の遺物と考えられ、小破片であることも勘案して混入品と捉えたい。

北トレンチ包含層出土遺物 (Fig.11) 北トレンチの包含層からは、38-42の遺物が出土した。38・39が須恵器、40・41が灰釉陶器、42が瀬戸・美濃産の掃り鉢である。

38の須恵器は器径12.8 cmを測る古墳時代後期の坏身である。口縁部には弱い面が認められる。修正を経た遠江須恵器編年のⅢ期末に相当し、7世紀前半のものと考えられる。39は、SD06に隣接する遺物包含層から出土した。あるいは、SD06に伴っていた可能性がある。把手付の坏身であり、口径10.2 cmを測る。把手は台形を呈し、断面は長方形である。把手の表面はヘラケズリによって彫形している。9世紀前半頃のものとして推定できるが、SD06の時期まで使用された可能性は十分考えられる。40・41の灰釉陶器の底部にはヘラケズリ調整の後、ナデが施されている。41は焼成状況が悪悪であり、黒斑のような色調である。42は瀬戸・美濃産の掃り鉢の口縁である。口径29.2 cmを測り、色調は暗紫灰色を呈する。16世紀頃のものと考えられる。

SD02 出土遺物 (Fig.12) 南トレンチのSD02からは、43-63の遺物が出土した。43・44は須恵器、45-51が灰釉陶器、52-63が土師器である。

須恵器43・44は、いわゆる箱坏といわれる坏身である。灰釉陶器のうち45・49-51が甕、46・47が皿、48が深碗である。灰釉陶器の高台は49のような角高台の名残を留めるもの、45・46のように、外面の稜線が曖昧な低い三角形を呈するもの、50・51のような二等辺三角形に近い形態のものが認められ

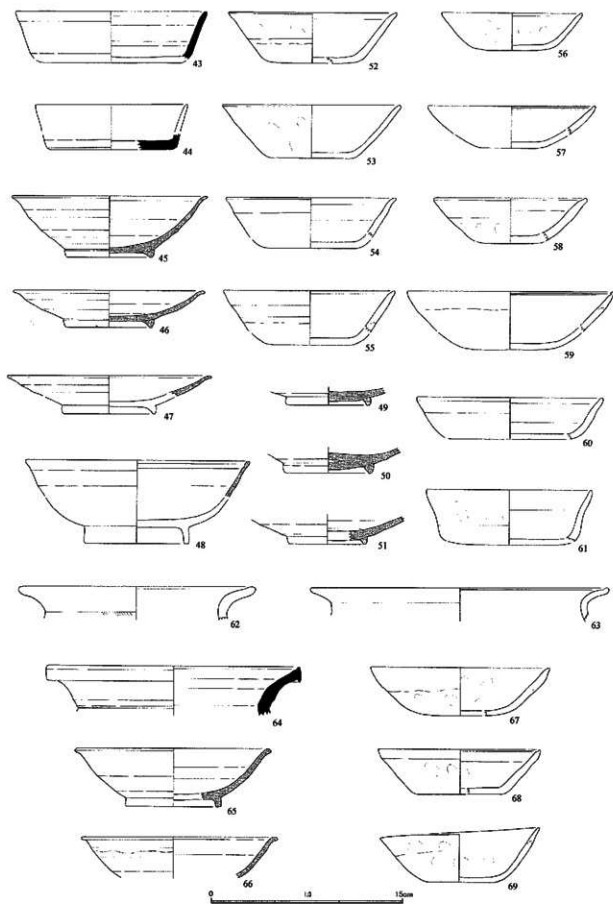


Fig.12 南トレンチ出土遺物
(43-63: SD02 64-69: 包含層)

る。底部調整は、古い傾向の高台をもつ49と50にはヘラケズリがみられる。いっぽう、高台に新しい傾向が看取できる45と46には糸切痕が観察でき、新旧の技法をもった個体が共存している。48は直立する口縁の内面に弱い沈線が施されるもので深碗に相当すると推定される。灰釉が発色する個体は47・48・50である。

土師器は52～59が碗、深い底部をもつ60と61は坏身とする。57・59には口縁端部内面に沈線が施される。土師器の碗の調整はヨコナデを基本とするが、明確に特徴を捉えることは難しい。すべて内面のみ赤彩が確認でき、52や55においては、刷毛によって赤彩を施した痕跡が明瞭に観察できる。60・61は土師器の坏身である。須恵器の箱環と形態的には似ている。内外面ともにヨコナデ調整を施し、60は内外面、61は内面に赤彩が確認できる。

SD02の出土遺物は、灰釉陶器をみる限り、古相と新相が混在している。すなわち、49・50はSD06と同段階の黒笹90号窯式に、45や46は折戸53号窯式にそれぞれ相当する。須恵器の坏身43・44や土師器の坏身60・61などはさらに古い様相であるが、黒笹90号窯式段階と共存しても矛盾はないだろう。以上のことから、SD02の遺物群は9世紀後半から10世紀前半までの時間幅を持たせて捉えておきたい。

南トレンチ包含層出土遺物 (Fig.12) 64～69は南トレンチの包含層から出土した遺物である。64が須恵器、65・66が灰釉陶器、67～69が土師器である。

65の灰釉陶器は底部が深く、角高台をもつ。底部はナデ調整が施され、灰釉は施されていないが、黒笹90号窯式に相当しよう。66の灰釉陶器は、灰釉が良好に発色する。口縁端部は丁寧に折り曲げられ、器壁も薄い。黒笹14号窯式の新相ないしは黒笹90号窯式の古相に位置づけられるだろう。

67～69は土師器の碗である。68は内外面のヨコナデが顕著で、口縁端部の沈線も明瞭である。これにたいして、67や69はヨコナデが看取できず、外面には指頭正痕が看取できる。口縁端部の形状も、単純な先削りである。器形も両者は若干異なることから、これらの技法差は時期差を示す可能性が高い。

SD03出土遺物 (Fig.13) 70～73、及び移動式竈77は南西別区のSD03から出土した。図示したのはすべて土師器であるが、須恵器の甕の破片も共存している。70は高台付の皿である。内外面において赤彩が認められる。71・72は甕の口縁部である。72は後述する移動式竈の破片に粉れていた。また、図示できなかったが、須恵器の甕の破片も同じ地点から出土している。これらの遺物群は8世紀後半～9世紀前半と推定でき、次に述べる移動式竈の時期も同時期と捉えたい。

移動式竈 (Fig.14) 77は小型の移動式竈である。掛け口から炊き口にかけての破片と、裾部分の破片が存在しており、双方の破片から求められる復元径から全体像を推定した。推定高15.2cm、裾部分の直径26.6cm、掛け口部分の直径13.0cmを測る。厚さは5～7mmである。掛け口はほぼ円形を呈する。掛け口は、比較的丁寧に整形されており、内側に糊いた端面をなす。裾部分の内面には粘土の折り返しを

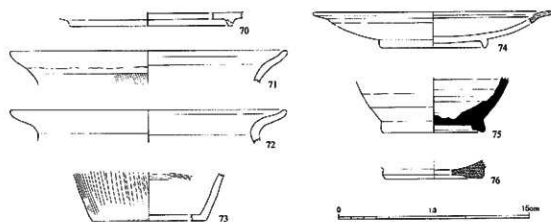


Fig.13 南西別区出土遺物
(70～73:SD03 74:SP03 75・76:包含層)

みられる。調整方法にかんしては、内面はヨコハケ、外面はナデが主体で部分的にタテハケがみられる。外面には指頭圧痕や、一部粘土紐の継ぎ目も残る。底は全く残存していないが、剥離した痕跡が確認でき、粘土が貼付されていたことが分かる。ただし、底が貼付される位置は炊き口の端部であり、全体的な形態は曲げ底の系統といえる。底部分が残存していないため確定的なことはいえないが、底の貼付後に炊き口の端面を調整している可能性がある。把手の存在は、遺存部分が少なく不明である。ただし、左右の残存部分においては把手の痕跡を認めることができず、ほんらい存在していなかった可能性が高い。

竈には被熱の痕跡を認めることができない。また、スズなどの付着もみられず、恒常的に使用していた印象は受けない。

その他南西別区出土遺物 (Fig.13) 74はSP03から、75・76は包含層中から出土した。74は灰釉陶器の段皿、75は須恵器の甕の底部である。76は緑釉陶器である。素地は浅黄褐色、釉薬は浅黄緑色を呈する。高台形態は蛇の目高台であり、高台下面まで釉薬が認められる。高台の形態と全面施釉の特徴から、おおよそ9世紀中頃から後半代の製品と判断される。

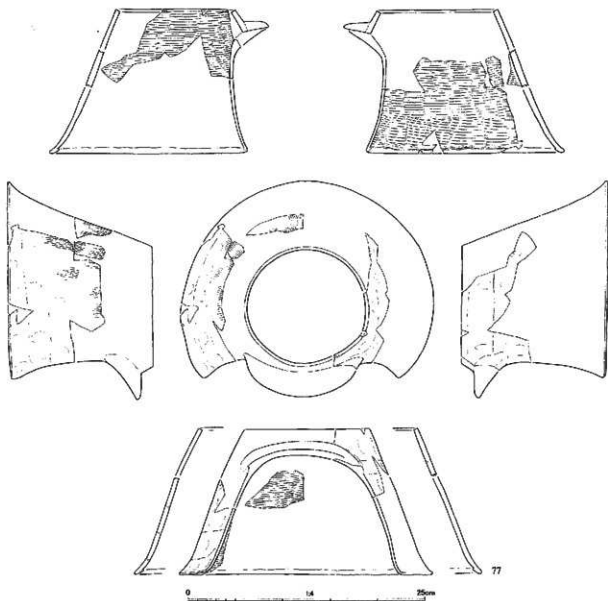


Fig.14 SD03出土移動式竈

第 3 章 総 括

今回の調査によって、平安時代の集落跡の存在が明らかになった。9世紀後半の一括資料や緑釉陶器は、出土数が少なく貴重である。また、8世紀後半～9世紀前半と推定される移動式竈は、一つ掛けの形式として遠江初出土である。本例は小用品であり、祭祀用と考えられる。

検出遺構 笠井若林遺跡4次調査によって、黒笹90号竈式期（およそ9世紀後半代）を中心とする平安時代の集落の存在が明らかになった。限定的なトレンチ調査のため、集落を構成する竈施設は明らかにできなかったが、北トレンチにおいて検出したSK01は竪穴建物、南西別区で検出したSP02、SP03は掘立柱建物の可能性がある。浜松市内では9世紀後半代における集落の調査例がまだ少なく、集落景観の詳細に迫るには至っていない。まとまった遺物が出土したSD02やSD06の性格も不明である。ならんかの区画を表す可能性があるが、満の規模が小さく確証的ではない。

9世紀後半の遺物 SD06、及びSD02から出土した遺物は、9世紀後半を中心とした良好な一括資料である。SD02出土遺物は若干の年代幅があるようだが、両者とも良く似た様相をみせている（贊1997）。

灰釉陶器は黒笹90号竈式の碗と皿が主体であり、その他の器種が少量ともなう。土師器の食器についても碗、皿が主体である。土師器の碗と皿は、灰釉陶器を模した高台付のもの（高台付碗・皿）と、高台のない扁平な底部をもつもの（無高台碗・皿）に分けられる。無高台の碗・皿は底部が奈良時代の形態と比べて小さく、逆台形をなす。鉢(27)は奈良時代後半に出現する系統であるが、この段階まで残存していると考えたい。土師器の甕は奈良時代から続く長胴甕である。ただし、11縁が扁平で水平に開く奈良時代後半の甕と比べ、口縁部がやや直立傾向にある。口縁端部が厚いことや、積み上げた形態をみせる特徴も今回出土した資料では顕著である。

緑釉陶器 南西別区から出土した緑釉陶器（76）は出土地が限定される。緑釉陶器は一般的な集落にもたらされることも多いが、Fig.15に示すように、遠江においては官衙跡と推定される遺跡からの出土が目立つ。ただし、緑釉陶器の小破片のみに注目した評価は差し控えなくてはならない。笠井若林遺跡1

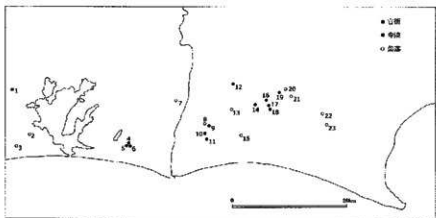


Fig.15 遠江における三彩・緑釉陶器出土遺跡

- 1:瀬西市大知時崎寺 2:瀬西市横林 3:瀬西市東笠子 4:浜松市岡子北 5:浜松市城山 6:浜松市伊場 7:浜松市笠井若林 8:磐田市河原 9:磐田市見付権城 10:磐田市国府台・国分寺 11:磐田市御殿・二之宮 12:浜松市春町 13:浜松市土橋 14:浜松市坂原 15:浅羽町十二所 16:掛川市原川 17:掛川市御橋北 18:掛川市御橋 19:掛川市六ノ坪 20:掛川市原 21:掛川市掛川城址 22:袋井町東ノ坪 23:袋井町御館所

次～3次調査において出土した数点の円面甕や墨書土器、東に接する社口遺跡で出土した円面甕などの特殊遺物や、遺構の構成など、断片的な情報を丹念に拾い出す必要がある。

移動式竈 南西別区のSD03から出土した移動式竈は、一つ掛けの形態として遠江では初めての出土である。全体的な形態は曲げ庇の系譜を引くが、焼き口部分に庇を貼付する特徴をもつ。焼き口端部の庇における粘土貼付の技法は、二

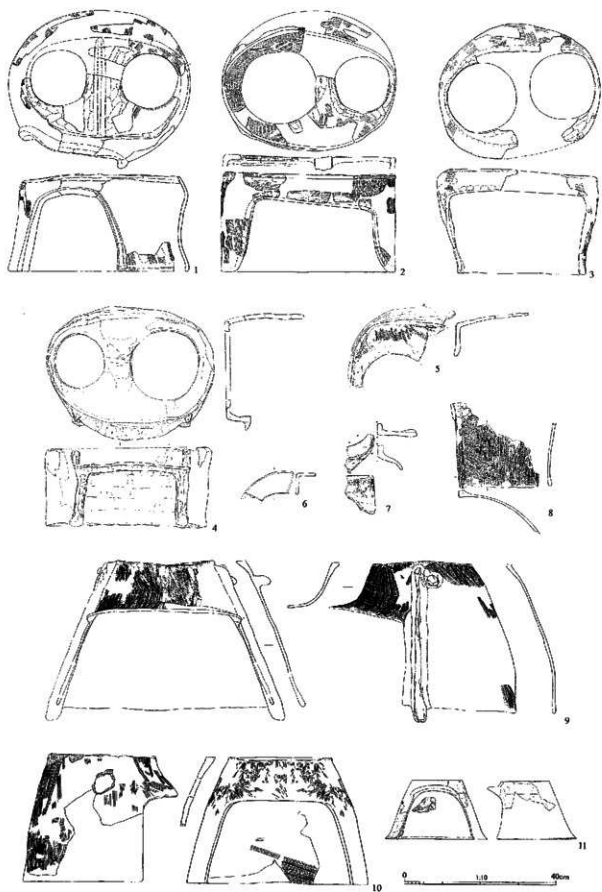


Fig.16 移动式龕集成
 (1-3: 西渠渠 4-8: 下洞 9: 江占山 10: 槐坪 11: 笠井岩村)

つ掛け竈の例であるが浜松市下滝遺跡例や浜松市西畑屋遺跡例にみられ、近隣地域に共通する。また、裾部分にみられる折り返しは、奈良時代の台付大型竈の脚台部にみられる技法と酷似している。器壁の厚さ、ハケを用いた内面の調整技法、色調なども在来の土師器甕とよく似ており、本例が土師器甕の製作技法の系譜上で製作されたことが理解できる。

ただし、本例にみられるような外面をナデによって仕上げる特徴は土師器甕には見られない。三河地域で多数確認される移動式竈は、8世紀以降において内外面ともにナデ調整に変化する(岡安1997・2000)。ただし、三河地域でみられる移動式竈との大きさの差や、細かな製作技法の違いは顕著である。形態や外面調整が似ているだけで、三河地域の移動式竈との共通性はむしろ少ない。以上のことから、本例は在地の製作技法によりながら、外観のみ周辺地域にみられる移動式竈の特徴を模倣したと評価できるだろう。

今回出土した移動式竈は高さ15cm程度の小型品である。三河地域において確認される移動式竈の高さは30cm～40cm程度であることを考えると、明らかに小型である。しかし、使用痕が明確でないものの、実際に甕を据えて使用することも可能であり、模造品とはいえない。移動式竈は日常的な実用品ではなく、宗教的祭祀において型なる食物を調理する際に使用される「第二の竈」とであるという評価(福田1978)が一般的である。笠井若林遺跡例の大きさも、特殊性の中に意味をみだしたい。

浜松市内では、透江の中では群を抜いて移動式竈の出土例が多い。下滝遺跡(浜松市1997)において6個体以上、西畑屋遺跡(浜松市1999)において5個体以上、阿弥陀遺跡(金子・川岸1952)において3個体以上が出土している。西畑屋遺跡例や阿弥陀遺跡例は大規模な祭祀空間から出土しており、日常的な生業とのかかわりあいは少ない。両遺跡とも大規模な焚き火を行った痕跡が検出されている点も示唆的である。両遺跡の特殊な性格は、移動式竈を祭祀用の第二の竈とする立場を裏付けるだろう。

笠井若林遺跡から出土した移動式竈もその大きさや、移動式竈が希少なことから、祭祀用と考えたい。今後は、笠井若林遺跡の総合的な評価のなかで、いかなる祭祀に使用されたか検討する必要があるだろう。

[参考文献]

- 福田1978 福田孝司 1978 『忌の竈と土権』『考古学研究』第25巻第1号
- 井上ほか1998 井上喜久夫ほか 1998 『日本の三彩と緑釉』愛知県陶磁資料館・五島美術館
- 岡安1997 岡安雅彦 1997 『三河地域で出土した甕形土器』『三河考古』第10号
- 岡安2000 岡安雅彦 2000 『西三河出土の甕形土器』『安城市歴史博物館研究紀要』No.7
- 金子・川岸1952 金子量重・川岸俊彦 1952 『阿弥陀遺跡調査報告』国学院大学阿弥陀遺跡調査班
- 近澤1992 近澤豊明 1992 『甕形土製品について』『長岡京古文化論叢』
- 豊田市1996 豊田市教育委員会 1996 『御坪遺跡Ⅱ』
- 賢1997 賢元洋 1997 『古代透江の食器具』『静岡県考古学研究』No.29
- 浜松市1997 (財)浜松市文化協会 1997 『下滝遺跡群』
- 浜松市1999 (財)浜松市文化協会 1999 『西畑屋遺跡1999』
- 浜松市2000 (財)浜松市文化協会 2000 『御殿山遺跡』
- 森1997 森泰通 1997 『移動式カマドについての覚え書き』『三河考古』第10号

[図出典]

Fig.15 井上ほか1998収録の地名表と、新知見をもとに筆者作成

Fig.16 1～3:浜松市1999、4～8:浜松市1997、9:森1997、10:岡安1997 の各文献から引用、一部改変



1 調査地区全景 (北西から)



2 北トレンチ (東から)



3 北トレンチ (西から)

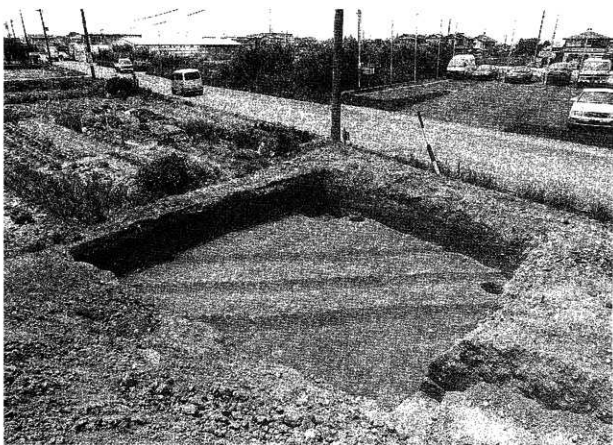
PL.2



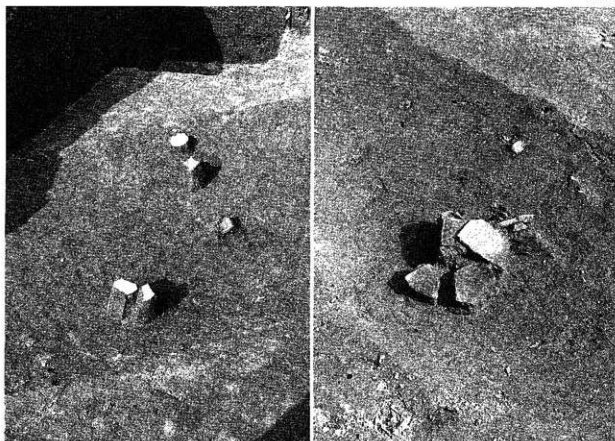
1 南トレンチ (東から)



2 南トレンチ (西から)



3 南西別区 (北東から)



1 南トレンチ SD02 遺物出土状態 (西から)

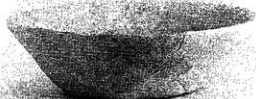
2 南西別区移動式竈出土状態 (北西から)



3 主要出土遺物



1



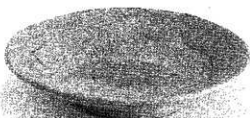
22



2



23



16



25



SD06出土遺物集合



45



52



46



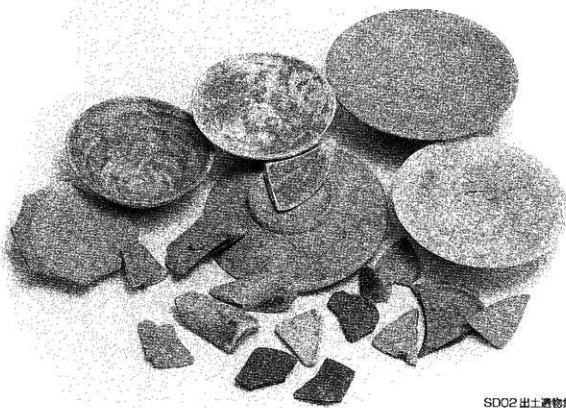
52



53



56



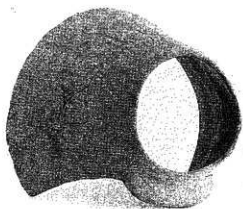
SD02 出土遺物集合



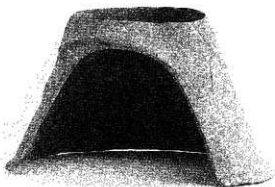
68



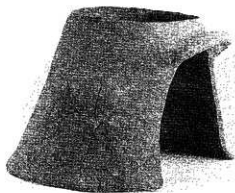
69



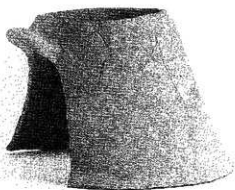
77



77



77



77

報告書抄録

書名(ふりがな)		笠井若林遺跡4次 (かさいわかばやしせいせき4じ)						
編著者名		鈴木一有						
編集機関		浜松市博物館 静岡県浜松市東塚4丁目22-1 TEL (053) 456-2208						
発行機関		財団法人 浜松市文化協会 静岡県浜松市早馬2-1 TEL (053) 453-5234						
発行年月日		2000年8月30日						
遺跡名 (ふりがな)	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
笠井若林遺跡 かさいわかば やし	静岡県 浜松市 笠井町	22202	10	34度 45分 32秒	137度 47分 51秒	2000年 5月22日 ～ 5月24日	100㎡	跡塔所関連 施設建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
笠井若林遺跡	集落	奈良時代後葉～ 平安時代初期 平安時代前期	溝	土師器・移動式竈		一つ掛けの移動式竈 は遠江初川上 黒管90号竈式併行期 の土器群		

笠井若林遺跡4次

—浜松市 笠井町 笠井若林遺跡 第4次発掘調査報告書—

2000年8月30日 発行

編集機関 浜松市博物館
〒432-8018 静岡県浜松市東塚4丁目22-1
TEL(053)456-2208 FAX(053)456-2275

発行機関 (財) 浜松市文化協会

印刷 中部印刷株式会社

Kasai-wakabayashi site

The 4th excavation report

Hamamatsu Historical Museum

Shijimizuka 4-22-1 Hamamatsu City,
Shizuoka Prefecture, Japan 〒432-8018



緑釉陶器 (SD03 出土)

Green Glazed Ware (fig.13-76)

August, 2000

The Association for Cultural Creation Hamamatsu City